
星からのプレゼント

ハイダウェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星からのプレゼント

【Nコード】

N2862P

【作者名】

ハイダウェイ

【あらすじ】

クリスマス小説 5本立て 第1弾！

模様替え中に見つけた友達が置いていった星占いの雑誌。

資源ごみにする予定が急展開！素敵な男性に出会ってしまう・・・

ラッキーカラーを身につけた節子にクリスマスは来るのか？

銀河を舞台にした大スペクタクル！（大嘘）

1話(前書き)

> i 1 5 0 9 4 | 5 1 1 <

画像をクリックするとボクの演奏が聴けます
よろしければ・・・

1話

いつも年末にバタバタと大掃除をする私が、何となく部屋の模様替えをするつもりではじめた掃除・・・
アホみたいに重いチェストやAVラックを移動させ、後ろに溜まった長年のホコリを
キレイにするとなんだか部屋のよんだ空気が澄んでいくような気がする。

「今年もあと26日で終わりかぁ・・・」
カレンダーを見ながらふとつぶやいてみた。

12月24日の下に書き込みがしてあるのは、この日のシフトが23時までだからだ。

私のバイト先のコンビには、近くに女子大があるせいか結構学生のバイトが多い。

24日は休みを取る子ばかりで、用事のない私に白羽の矢が当たったと言っわけだ。

用事がない？ 確かにその通りだ。 今年は何も無い。

まあ、去年のクリスマスはさすがにムカついたけど・・・

といっても別に彼氏とディナーとかそういうものじゃなく、観たかったドラマの最終回が

その日で、しかもビデオデッキが故障してて録画する事もできない。まさに休む理由として完璧なシチュエーション！

で、その事を店長に言ったら、「俺がちゃんと録画しておいてやる」とか何とかって事で

渋々承諾して出勤。

翌日ビデオを借りたら違う番組が録画されてたってオチだった。

思い出しても腹が立ってくる・・・
気分を害した所でリフレッシュするため紅茶を入れることにした。
お気に入りのCDをかけながらオレンジペコのティーバックをそっ
と鼻に近づけてみる。

「いい香り・・・」

10月1日の誕生日に裕子から貰ったものだが、飲むのはまだ3回
目だ。

そういえばこの本も裕子が置いていったものだっけ・・・
掃除しててチェストの後ろから出てきた星占いの本を手にとってみ
た。

今年の2月に、イラストを練習するのに丁度いい絵があるというて
持ってきてくれたものだ。

裕子とは高校時代からの親友で、二人とも絵を描くのが好きだった
こともあり一昨年までは
時々二人でコミケに参加したりしていた。

パラパラとめくっているとドッグイヤーがついてるページがあった。
ふたご座のことが書いてある。6月16日生まれの裕子の星座だ。
読んでみると結構当たってるような気がした。 彼氏とラブラブ的
なことが書いてある。

短大時代から付き合ってる勇希とは卒業後もうまくいって、そ
ろそろ結婚か？

そんな感じである・・・

この本を持ってきたときの会話を思い出した。

「へー、裕子こういう本読むんだあ」

「結構当たるんだよねー。 ラッキーカラーとか必ず身につけてる
しね。ほら、このピアス

私のラッキカラーなんだ」

「それでいつも ルビーのピアスしてるんだあ」

「うん。せっちゃんもやってみたら？」

「あっ・・・うん・・・私はいいや。そういうのあんまり信じない方だから・・・」

あの時はああ言ってたけど、ホントはすごく星占いにハマってた時期があった。

中学の頃だ。だけど全然当たらなかったから、あえて見ないようにしていたのかもしれない。

初恋の事を思い出して少し胸が苦しくなった。

気を取り直して オレンジペコを飲みながらてんびん座のページをめくってみた。

今年のラッキーカーはパープル・・・

パープルって紫？

「そんな物身近に無いじゃん！」と一人突っ込みを入れてみた。

そして占いには、そのアイテムを身につけたあなたはクリスマスに彼から素敵な

プレゼントをもらうでしょう・・・そう締めであった。

「彼氏居ないし・・・クリスマスは仕事だし」 また突っ込んでみる。

イラストのページは切り取ってあるから資源ゴミだなこりゃ・・・古いファッション雑誌と一緒に荷造り用の紐で縛って部屋の隅に片付けた。

2話(前書き)

掃除とかすると運気が上昇したりしますよねー^^

2話

結局1日中掃除と模様替えをしていて、気がついたら夜7時を回っていた。

ホントなら簡単な食事で済ませるつもりだったけど、さっきのカレシダーを見て

12月24日の夜まで健気に働く自分に何かご褒美があげたくなり、少しだけ

贅沢しようと思った。

先日買ったルーズネックのカットソーにデニムを合わせ、お気に入りロングブーツ

それにモッズコートを羽織っただけのラフなスタイルで夜の街に繰り出した。

住んでるワンルームは結構都心に近く、地下鉄を使えば20分ほどで繁華街に出られる。

家賃は5万2千円と自分にとって安くは無いけど、あまり贅沢をしなければ

何とかやっていける。今夜は特別なのだ。

どこにしようか？しばらく行き先を考えていて去年裕子と一緒に行ったダイニングバーを

思い出した。オシャレなレンガ作りの外観でイタリア料理がメインのバーだが

カウンターがあり、若い女性客が一人で来ることもしんないような店だった。

駅から5分ほど歩き真鍮しんごうに書かれたDolce・Vitaの文字を見て店の名前を

思い出した。

「そうそう！ドルチェ・ビータだった・・・」思わず独り言を言っ

てしまいちよつと

恥ずかしかつた。気分はそれほどノツているのだ。

甘い生活かぁ・・・関係ないね・・・。そんな事を考えながら店の中に入ると予想外の

盛況ぶりだった。

カップルばかりだ・・・

去年来た時はそれほど混んでなかったし、女性客が多かったのに・・・なんで？

「いらつしやいませ！お一人様ですか？」ちよつとオドオドしながら立ち竦んでる私に

見覚えのあるウエイターが声をかけてくれた。

「あつ・・・はい。混んでそうですね？」

「すみませんねー。先日テレビの取材があつてからちよつと忙しくて・・・」

「じゃあ・・・また来ますね・・・」そう言って店を出ようとした時、カウンターの男性がマスターに何か言ったようだった。

「こちらの席でよろしければ・・・」

マスターがカウンターの開いてるところを指しながら微笑んでる。

「どうぞ　どうぞ・・・どうもフラれたみたいで・・・」
そう言いながらスーツ姿の男性がこちらを見た。

「ナベさんいつもの事じゃないですかぁー」マスターがその男性客に笑いながら

話しかけている。常連さんなのだろうか？

「今夜も一人寂しく、マスターのダジャレ聞きながら飲むターキーは格別だわ」

なんか面白そうな人だ。ちゃんと顔は見てないけど結構いい感じじゃないかな？

いい席が空いてた。そう思いながら座ると、さっきのウェイターが話しかけてきた。

「いつだったか・・・裕子さんと一緒にいらっしやいましたよね？」

「あつ！・・・憶えてるんですか？ スゴイ！」

「ええ。きれいな方は全員インプットされてますんで
そう言いながらシェーカーを振っている。」

良かったあ・・・こないいい気分になれるなんて久しぶりだな。
もつとお給料があつたなら、毎日でも来たくなるのかもしれない。
そんな雰囲気だ。

「お飲み物は？」

「えつと・・・ワインを・・・赤で・・・」

お酒はあんまり強くはないけど、今日は少し飲んでみたかった。

「あつ・・・それじゃあボクと一緒に飲まない？ 今 開けてもら
つただけど・・・」

一人じゃ飲み切れそうもないから・・・」

「そんな・・・悪いですよー」

「いいの いいの。 マスターグラスをもう一つ」

「はい。 良かったですねー。 寂しくなくなって」

「じゃあ・・・素敵な夜に・・・乾杯！」

優しそうな横顔でチラッと私を見ながらその男性が言った。

3話(前書き)

ショートストーリーなので
次回で完結です

3話

「あのー・・・さっきフラれたって言ってましたけど・・・デートだったんですか？」

何か話さないと、って考えた末に出た言葉がそれだった。

言ってから何でそんな事聞くの？って自分に突っ込みを入れたくなるぐらい後悔していると

笑いながらその男性が答えてくれた。

「いつもの事なんですよー。時々仕事帰りにここで待ち合わせをするんだけど・・・」

フラれてばかり。それより・・・君はよく一人で飲みに来るの？」

「そんな事ないんです・・・ここには一度来たきりだし、普段も飲みに出るなんて

ほとんど無いから・・・」

「そうなんだ。じゃあ今日は特別？　ボクは良い日に来たってわけだ。」

何か良いことでもあったの？」

「全然・・・どっちかって言うと逆かな。ちょっと気分転換みたいな感じです・・・よくいらっしやるんですか？　ここには」

「そうだなあ、週1・・・位かな・・・ね？　マスター」

そう言いながらワイングラスを傾ける姿は、ちよっと大人って感じがした。

オシャレな会話と美味しい料理を食べながら、楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

「じゃあ、明日早いでこの辺で……あっ……お名前聞くの忘れてました。」

ボクは渡辺純也、すぐそのS商事に勤めてます」

「あっ……私は、節子って言います。今日はありがとございまして！

とつても楽しかったです……」

なんだかスゴク寂しい感じがした。もちろん彼女と待ち合わせしてたんだから

好きになつたりしちやいけないんだけど、もつと色んな話をしたかった。

彼はどちらかといえば聞き上手なタイプで、自分の事はあまり話さなかつたから

なお更だつたのかもしれない。

私はその後30分ぐらい居たけど、ワインを3杯も飲んだせいか少し頭が痛く

なつてきて店を後にした。

「ジュンヤさんかぁ……素敵な人だつたなー。優しそうだし……」

湯船に浸かりながら一昨日の会話を思い出していた。

またあのお店に行ったら会えるのかなぁ？……でも、彼女と一緒に居たら……

そんなどうにもならない事ばかり考えてる自分が少し嫌になる。

私も恋がしたい……本気でそんな事を考えていた。

「占いに書いてあったラッキーカラーとか身に着けてみようかなあ
・・・」

翌日、近所の大型スーパーで紫色のグッズを探してみた。

「紫とか・・・全然無いし・・・」
そんな事をブツブツつぶやきながら何気なくCDショップを覗いてみる。

別に欲しいCDがあるわけじゃないけど、雰囲気が好きなので時々入るのだが

この日は店内にハードロックの曲が流れていた。

知らないバンドの新譜が出たらしく、キャンペーンをしているみたいだ。

おすすめコーナーをボートとしながら歩いていると、Purpleの文字が目に入った。

「Purple? 紫じゃん!」

そう思ってジャケットに手をやると、そこにはDeep Purpleと書いてあった。

なんか聞いたことあるような名前だ。しかも紫にディープまでついでる・・・

かなり気になって曲名をじっと見てたら、後ろで聞き覚えのある声がした。

「節子ちゃん、そんなの聴くんだあ」

「えっ?・・・あつ! ジュンヤさん!」

もう心臓が飛び出すんじゃないかっていうぐらいビククリして、その場に立ち竦んでいた。

「パープル好きなの？ 節子ちゃん」

「はい……」

私なんて嘘ついてるんだろ？ そう思いながら彼の反応を探っている……

「へー……年に似合わず渋いの聴くんだねー。ハードロックとか好きなの？

今度さー……ライブやるんだよね。聴きに来ない？ もちろん招待するから

チケット代とか要らないし……」

「バンドやってるんですか？ 行きたいです！」

彼にライブの日時や場所を聞き、私は夢見心地で家に帰ってきた。

「私を誘ってくれるなんて……ひよつとしたら彼女とうまく行ってないのかも？」

そうでなければ招待するなんて言わないよね？」

そう思う心と、「ミュージシャンだから誰にでもそんな事言うんじゃない？」

という考えが交互に現れ食事も取れないほどだった。

それでもライブ当日までにロックの事を少しでも知っておきたくてCDを何枚も買い、youtubeやネットを観ては毎日予習を欠かさなかった。

4話 完結（前書き）

この話はこれで完結です クリスマスまでに後4本いきまーす

4話 完結

ライブ当日はかなりの人が会場に集まっていた。

全部で4組のバンドが演奏するようで、プログラムでは彼のバンドがトリである。

「節子ちゃん！来てくれたんだね。よかったー」

「凄いお客さんですね！ビックリしました。ジュンヤさんのバンドがトリなんですね。

楽しみです」

「食事はまだでしょ？ 簡単な料理が出てるので持ってくるよ。飲み物はビールでいい？」

そう言って彼は奥のカウンターの方に歩いていった。

彼女来てないのかな？ 私は彼の後姿を追いながら周りを気にしていた。

「はい。お待ちどーさま」そう言いながら紙コップに入ったビールを手渡してくれた。

左手には器用に、自分のビールと唐揚げやサンドイッチをのせた紙皿を持っていく。

「テーブルが無いから・・・ここから取ってね。ほら、もうすぐ1組目のバンドの演奏が始まるよ」

彼は当たり前のように私の右側に並んでステージの方を見ている。

ずっとここに居てくれるのかなあ？ 彼女来てないのかも？
少し嬉しくなっていてビールを口に運んだ。

3組目のバンドがステージに立つと「そろそろ行かなきゃ・・・」
そう言って

楽屋に入ってしまった。

結局2時間近く彼と一緒にバンドの演奏を聴いていた。

曲が終わると、彼のバンドの話や好きな音楽の事を話してくれた。
予習したおかげで知ってる名前も結構出てきたりして、私が曲名を
言ったりすると

スゴク喜んでくれる。

束の間かもしれないけど幸せな時間だった。

彼のバンドがステージに出てきて演奏を始めた頃には、私は感無量
のあまり

泣いてしまっていた。彼のギターから奏でられる音は時に優しく、
あるいは力強く

私を包み込んでくれているようだった。

そんな時間が一瞬にして消えたのは、演奏が終わって楽屋を覗いた
時だった。

彼の左腕に抱きつくように、かわいらしい女の子が笑っているのを
見てしまったのだ。

その時の自分の顔を想像すると、今でも悲しくなるほど引きつって
いたと思う。

私は何も考えられなくなって、そのまま会場を飛び出し泣きながら
駅に向かって

歩いていた。

分っていた事なのに悔しかった。

少し期待していた自分のバカさ加減にうんざりしていた。

駅に着く頃にはほんの少し気分が落ち着いてきたが、瞼は多分腫れていたと思う。

自動販売機で切符を買っていると後ろで声がした。

「ねえ・・・はあ　はあ・・・なんで帰っちゃうの？」
驚いて振り返ると、そこには彼が立っていた。

「だって・・・」
そこまで言うと私はまた泣いてしまっていた。

「何か嫌な事があったの？」
俯いたままの私を、彼の優しい言葉が包み込む・・・

「彼女が居るんなら・・・優しくしないで下さい!」
これが精一杯の言葉だった・・・
私はその場から逃げ出したい気持ちで一杯だった。

「彼女って・・・ひょっとして楽屋に居た子？」

私は黙って頷いた。

「あれ・・・妹なんだけど・・・」

「えっ?・・・」

「1組目のバンドのボーカルのヤツと付き合ってた・・・遊びに来てたんだ」

私は恥ずかしさと嬉しさで、気が遠くなるような感覚を覚えていた。

「でも・・・彼女・・・居るんでしょ？ この前待ち合わせしてたつて・・・」

「ああ・・・アレは同僚だよ。もちろん男だよ。でなきゃ席を譲ったりしないって」

私は凄い勘違いをしてたんだ・・・真つ赤になりながら、恐る恐る彼の顔を見上げた。

「あのさ・・・来週の土曜日空いてないかな？ 一緒に食事とか・・・しない？」

「・・・それって・・・デートって事？・・・」

「うん。明日から出張で25日のお昼頃帰ってくるから・・・ダメかなあ？」

「ダメじゃない・・・私も・・・会いたい・・・」

「ホント！ 良かった・・・約束だよ！ 今日これから会場の片付けがあるから・・・」

これ・・・ボクの名刺。携帯の番号書いてあるから・・・後で電話してよ」

彼はそう言っつて 慌てて会場の方へ走っていった。

12月24日のコンビニはカップルの来店ばかりだった。

ビールやつまみを一緒に選ぶ姿は、見ているほうもドキドキするほどだ。

去年ならシラーっとした顔で無視するのだけれど、今年は全然違う。心が凄く暖かった。

翌日夕方、彼とイタリアンレストランで食事をし食後のデザートを食べていると

彼が小さな水色の袋を上着のポケットから取り出した。

「あの・・・これ・・・アメリカで買ってきたんだ・・・」

「ありがとう！ クリスマスプレゼントだね？ 開けていい？」

「うん・・・気に入ってもらえるか・・・」

袋を破らないように開けると、中には水色の小さな箱が入っていた。

その箱を開けると小さなダイヤが散りばめられた指輪が・・・

「サイズは調整してくれるって・・・」

「こんな高そうなもの・・・貰ってもいいのかなあ・・・」

「ボクと・・・その・・・付き合って欲しいんだ・・・」

多分私は何か言ったのだと思う。嬉しくて泣いてしまい全然覚えてないけど・・・

レストランからの帰り道、彼と一緒に歩きながら私のi podに入っているお気に入りの曲を

仲よくイヤホンで聴きながら歩いていた。

先日まで予習のために何百回も聴いた曲だ。

Deep Purple ディープ・パープル の Burn バーン

笑っちゃうほどクリスマスに似合わない曲だけど、どのクリスマスソングより

街のイルミネーションにピッタリだと思った。

翌年、二人でロッキのライブに行った帰り、酔っぱらった彼が私のマンションに泊まった。

朝トーストを焼いていると、彼がベッドで不思議そうな顔をして星占いの雑誌を見ている。

「どうしたの？ 変な事書いてある？」

「そうじゃないけど・・・占いの本とか読むの？」

「あまり読まないけど・・・その本、凄く当たったんだあ・・・だから大事にとってあるの」

「へー・・・そうなんだ・・・」

「ほら・・・ここ、今年のラッキーカラーがパープルだって・・・クリスマスに素敵なプレゼントを・・・ねっ！ スゴイでしょ？」

「あっ・・・うん・・・そうだね。 だけどこの本2007年って書いてあるよ・・・」

「えっ？・・・うそっ！・・・ホントだ・・・」

「せつちゃん・・・笑ってもいい？・・・ククッ・・・」

「もう！ 信じられない！ おつかしい・・・あー 涙出てきたよ・・・」

「お腹痛い・・・死にそう！・・・そういうところ・・・大好き・・・」

r.

彼はそう言つと私を引き寄せ、顔中にキスしてきた。

携帯電話が毎朝の目覚ましの音楽を奏でている。

彼の鼓動を聴きながら小さな声で歌ってみた。

The sky is red, i don't under
stand,
Past midnight i still see the
land.
People are sayin' the woman is
damned,
She makes you burn with a wave
of her hand.
The city's a blaze, the town's
on fire.
The woman's flames are reachin
g higher.
We were fools, we called her l
iar.
All i hear is "Burn!"

画像をクリックすると曲が聴けます

> i 1 5 5 2 8 | 5 1 1 <

4話 完結（後書き）

いかがでしたか？ ちょっとモテない女子側のクリスマスストーリー
ーでした。まあ、ハッピーエンドはクリスマス用ですから・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2862p/>

星からのプレゼント

2011年5月3日06時33分発行